

ン、ヒメサツラン、ノキシノブ、アオネカヅラ、クマワラビ、シラガシダ、イワトラノオ、スリトラノオ、オオバノイノモトソウ、オオバノハチジョウシダ、シケシダ、マメヅク、ミゾシダ、ゲシダ、ハシゴシダ、イハハゴ、オオクツヤクシダ、イノモトソウ、ピロウドシダ、シシラン、イワヤシダ、オオヒメワラビモドキ、ノコギリシダ、ミヤマノコギリシダ、ヒロハヤブソテツ、カナワラビ、ハカタシダ、タニイヌワラビ、ミヤコイヌワラビ、イノデモドキ、サイゴクイノデ、(ぜんまい科)ゼンマイ、(きじのおしだ科)キシノオシダ、オオキシノオ、(こけしのぶ科)ウチワゴケ、アオホラゴケ、ホンバコケシノブの如き多数の要素をあげることができる。

南系植物中支那大陸と分布関係を有するものとしてヤマイバラ、クロタキカヅラ、ユクノキ、ジャケツイバラ、シキミ、ヨコグラノキ、イワヤシダ等が所謂中部支那要素として著しく、近畿地方を分布の中心とする分子にミカエリソウ、ウラジロウツギ、ユキワリイチゲ等があり、中国地方を分布の中心とするものにはナトセカヅラ、ナツアサドリ、キバナサバノオ、モミヅカラスワリ等の如きものが見られる。

次に暖地性要素として著しいのはサカキ、ヒサカキ、ヤブツバキ、リンボク、カゴノキ、シロダモ、ヤブニッケイ、シキミ、ユズリハ、アセビ、マンリョウ、ヤブムラサキ、シラキ、イイギリ、イヌザンショウ、ヒメノヤガラ等があり、又シダ類の多くは台湾、琉球と分布関係を有するものである。

(B) 北系植物

北系植物要素とは沿海洲、カムチャツカ半島、樺太、千島、北海道と分布関係を有するもので、本州中部以北の山地に多く、本州西南部、四国、九州に及ぶものである。船越山では南系暖地要素に比して種類、個体共に少いが主なものは、(きく科)キクバヤマボクチ、ノブキ、ヤマニガナ、(あかね科)オオバノヨツ

バムグラ、(いちやくそう科)ウメガサソウ、(リョウぶ科)リョウブ、(みずき科)ミズキ、(うこぎ科)ハリギリ、コシアブラ、(ざるなし科)マヌタビ、(いそのき科)クマヤナギ、(つりふねそう科)ツリフネソウ、キツリフネ、(とちのき科)トチノキ、(かえで科)イダヤカエデ、メグスリノキ、チドリノキ、(にしきぎ科)ツリバナ、(もちのき科)アオハダ、(うるし科)ツタウルシ、(まめ科)サイカチ、(ばら科)ケヤマザクラ、ウヲミズザクラ、コゴメウツギ、(ゆきのした科)ノリウツギ、ネコノメソウ、ダイモンジソウ、イハボタン、(もくれん科)ホホノキ、(あけび科)ミツバアケビ、(うまのあしがた科)トリアシショウマ、ルイエウショウマ、(かつら科)カツラ、(くまつら科)カリガネソウ、(いらくさ科)ムカゴイラクサ、ミヤマイラクサ、(にれ科)エゾエノキ、(せきちく科)ナンバンハコベ、フシグロセンノウ、(禾本科)タツノヒゲ、(かやつりぐさ科)カンスゲ、タニカワスゲ、(うらばし科)コタニワダリ、ナライシダ、リョウモンシダ、イヌガソク、ジウウモンジシダ、オシダ、ミヤマシケシダ、サカゲイノデ、オシヤクジシダ、(はなやすり科)ナツノハナワラビ等である。

この中カンスゲ、キクバヤマボクチは日本海側を分布の本拠とするもので、わづかに山脈を越えて南下している。又カツラ、トチノキは大木がわづかに見られるに過ぎず、一般に当地方山地に普通に産するものばかりである。

要するに船越山のフロラは南系暖地要素によつて成り、その間わずかに北系要素を交え暖帯北部のフロラを形成するものといえる。構成要素中にミヤマトバラ、ヨコグラノキ、クロタキカヅラ、キクカラクサ、ヒメノヤガラ、イワヤシダを含むことは船越山のフロラを特色づけると共に、分布上注目すべき点である。

(Feb. 10, 1952)

神戸税関附近に渡来した一植物

村 田 源

昨年筆者が山城産ヒユ科植物の調査をやつていた際京大の標本庫の中で宇野確雄氏が1939年に神戸税関構内で採集されたヒユ科の珍しい1植物の標本が出て来たのでしらべて見ると、フルノゲイトウ属の *Alteranthera repens* (L.) O. Kuntze であつて渡来植物として我が国では未記録のものであつた。これはブラジル、チリー、ペルー、メキシコ、カナリー諸島より北米のカロリナ州一帯の中南米に広く分布する雑草である草状を簡単に記しておく、匍匐性の多年草であつ

て、莖は多く枝を分ち径2mm内外で脱着性の白毛があり、葉は倒卵状広楕円形、長さ1.5-3cm内外、3mm内外の短柄があり先端は鈍頭で小さい刺があり、若い時は有毛である。花序は無柄で葉腋にあり、苞及び小苞は膜質で卵状披針形、1脈があり先端はするどい刺状となり、長さ3mm内外で無毛又はやや有毛。花被は不同で5片、2ヶは卵状披針形で長さ5mm内外、3脈があり先端はするどく鋭尖し基部は脈上に白毛がある。1ヶはやや短く先端は鈍頭で3脈あり長卵形で脈上基部

に白毛があり、他の2ヶは小さく長さ2.5mm内外、背は竜骨状にふくらんでその上に逆鈎のある白毛が束生している。雄蕊は5本、各間に仮雄蕊の突起があり花糸は基部癒合している。これはその後絶滅したが現在まだ生き残つてどこにはびこつているか筆者はよく知らないが、とにかく一時帰化したという記録をここにとどめておくことにする。幸いこの記事を眺まれた附近の同好の志によつてその後の状態が明かになればと念する次第である。和名はマルバツルノゲイトウとでも仮に名づけておくことにする。

なお阪神地方は我が国の玄関の1つでもあり戦後こうして益々外国との交通が盛んになるにしたがつて、こうした渡来植物の数も一そう増加することが予想される。これらの渡来の記録や伝説の記録をはつきりさ

せておくことは、植物の分布速度やその他植物地理学や生態学的な研究にも興味ある資料となることを信ずる。もしこうした方面に興味をお持ちの方々があれば、郷土の地の利を十分に生かして帰化植物の調査に当られんことを切望したいものである。

〔室井云〕宇野確雄氏は当時、神戸市親和高等女学校で博物の教師として御勤めでした当時は、熱心に採集され、同税関内でクリノイガ(禾本科)と云う様な珍植物も同氏がここで見出されました。然し惜いことには今では絶滅してしまいました。同氏は戦災後、郷里、岡山県倉敷市に引上げられ、倉敷高等学校に教鞭を採り乍ら、相変らず熱心に採集に努力されています。

西宮地区のマイマイ属の変異

東 正 雄

昨年6月25日生物部員荒田正司君の蒐集標本から、東海、伊勢、近江、山城地区に分布しているイセノナミマイマイ *Euhadra eoa commuaisiformis* Kanamara を発見、翌日部員早川・高津・荒田をつれて、満池谷で現地調査をして、次の如き結果を知り得た。

1. 人工分布であると推測される根拠は

- 棲息面積が狭く凡そ30m×2mでイヌツグの密生が約30mつゞいていた。このイヌツグは30~35年以前にはなかつた由(近くの老婦人からきいた)。
- その両側斜面は主として竹藪やナツツジの老樹がよく繁茂して日陰であり、湿润な腐植壤土で *Euhadra* の棲息には好条件であると思つた。
- 現地の山を開墾してイヌツグを生垣に移植した時、その葉裏にイセノナミマイマイの幼貝が運びられたらしい。

2. ナミマイマイと混棲状態であつた

黒田博士の棲分けの法則 即ち『同一種から発したと認めらるゝ2個以上の亜種は同一地点には棲息しない』。又黒田・波部氏著『かたつむり』P.106~P.107から引用すると『……ナミマイマイとイセノナミマイマイとは棲を同じくして分布していても場所的には判然と分れている……この現象が棲分けで……これは生物界に広く見られる生態学上の重要な法則である。』

以上の法則が満池谷では全く、くつがえされた。其後11月4日鈴木章司君と荒田正司君は新甲陽(前記満池谷から凡そ2km北方)からイセノナミマイマイやナミマイマイを沢山採集された。更に驚異な事実はギユリキマイマイ *Euhadra gulicki* Pilsbry に極めて酷似する30個の *Euhadra* を発見された。解剖の結果 genital-system の様式は *gulicki* の模式産地有馬の個体に比較して多少差異を見るが殆ど一致するもの、或はイセノナミマイマイからギユリキマイマイへ推移型を思わせる様な中間型もあつた。黒田博士の『イセノナミマイマイが山へのほればギユリキマイマイ型である』との学説を裏づける事実を標本によつて判然と解決できた。ハリママイマイ *Euhadra congenita* (Smith) の分布の東限は神戸布引附近と知られていたが太田佐喜夫君によつて芦屋市親王塚町(西宮市に接近している)に棲息していることを5月15日発見された。なお親王塚町には稀にイセノナミマイマイも採集される由であつた。従つて分布の東限が西宮地区に近づきつゝある様に思つた。

以上を要約すると西宮地区には従来のナミマイマイ、クチベニマイマイの棲息圏内に東海地区からイセノナミマイマイが満池谷→新甲陽→親王塚町へと拡がりつゝある。新甲陽に分布しているイセノナミマイマイはギユリキマイマイへ推移型を示している。